〔吾妻鏡二十五〕承久三年六月十三日丙寅、相州〇北條時房先向勢多之處、曳橋之中二箇間、並楯調鏃、官軍幷叡岳惡僧、列立招東士、仍挑戰爭威云云、

〔類聚大補任七順德〕承久三年辛巳

齋宮熙子內親王（中略）八月廿一日御歸京、路次臨幸代輿、以力者法師仕之、頭以下淨衣、於勢多橋東爪在御祓、

〔海道記〕四月〇貞應二年四日の曉、都出し朝よりも雨にあひて、勢田の橋のこなたにゑばらくとまりて、あまゑたくしてゆく、けふあすとも知らぬ老人をひとり思ひ置てゆけば、

おもひをく人にあふみのちぎりあらば今かへりこん勢田のなが橋

〔東關紀行〕曙の空になりて、せたの長橋うち渡すほどに、湖はるかにあらはれて、かの滿誓沙彌が比叡山にて、此海を望つゝよめりけん歌おもひ出られて、漕行舟のあとのゑら波、誠にはかなく心ぼそし、

世中を漕行舟によそへつゝながめし跡を又ぞながむる

〔太平記二〕俊基朝臣再關東下向事

駒モトヾロト踏ミ鳴ス、勢多ノ長橋打チ渡リ、行キカフ人ニ近江路ヤ、世ノウネノ野ニ鳴ク鶴モ、子ヲ思フカト哀ナリ、

〔太平記二十二〕佐々木信胤成宮方事

土佐守伊勢國ノ守護ニ成テ下向シケルガ、〇中略勢多ノ橋ヲ打渡レバ、衣手ノ田上河ノ朝風ニ、比良ノ峯ヲタシ吹來テ、輿ノ簾ヲ吹揚タリ、出絹ノ中ヲ見入タレバ、年ノ程八十計ナル古尼ノ、額ニハ皺ノミヨリテ、口ニハ齒一モナキガ、腰二重ニ曲テゾ乘タリケル、土佐守驚テ、〇中略尼ヲバ勢多ノ橋爪ニ打捨テ、空輿ヲ舁返シテ、又京ヘゾ上リケル、

〔梅松論下〕山上の敵退せざる間、九月中旬〇建武三年に小笠原信濃守貞宗、甲斐、信濃兩國の一族幷軍